

【別紙様式 I】 令和5年度 学校評価報告書

学校名 依知小学校

厚木市教育委員会の基本目標

- 1 自ら学び、鍛え、未来を拓き、夢や可能性に挑み続ける力の育成【挑戦】
- 2 自他の命や豊かな感性を大切に、多様性を認めながら共に生きていく力の育成【共生】
- 3 変化する社会に自ら進んで関わり、人々と協働してより良い社会を創る力の育成【創造】

校長名 田所 直子

学校教育目標

学校経営の方針

自律と尊重
 自律: 自分で考え 自分で決めて 自分で行動する児童を育てる。
 尊重: 互いに認め合い 折り合いをつけながら生活できる児童を育てる。

・すべての子どもが「ホーム」中心に学ぶことができる学校づくりをめざす。・「自律した学び」ができる子どもを育てる。・すべての教職員ですべての子どもを育てる意識をもち、チームで児童支援をする。・学校(全教職員)、家庭(全保護者)、地域の協働体制で子どもを育てる。

今年度の重点目標

- ①ホーム中心の学び ②自律した学び手の育成 ③学ぶ意欲の向上 ④児童指導、児童支援体制の充実 ⑤地域学校協働活動の推進

評価項目・指標等	基本目標との関連	具体的な取組	成果と課題	次年度への具体的な改善策
ホーム中心の学び	2・3	・職員会議等での継続的な理念の確認とサポートタイムの充実 ・校内支援ルームの設置	・サポートタイムで多くの教職員が学年を越えて児童の支援ができたことで、ホームクラスで学ぶことが基本となっている。そのうえで、校内支援ルーム(えちっこルーム)の立ち上げで、個々の教育的ニーズに合わせた校内支援体制が充実した。	・校内支援ルームのさらなる充実で不登校の未然防止 ・ホームクラスでの、「個別最適化な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実
自律した学び手の育成	1・3	・「宿題」から「自学習」への移行を図る。	・従来の「宿題」から、3年生以上は段階的に自学習への移行を図った。目的に向かって主体的に、計画的に学ぶことのできる力をつける取組だが、学校評価等から、その根本的な理念が、児童、保護者に十分伝わっていないことがわかった。	・主体的な学びの必要性の具体的な周知 ・児童の主体的な学びを支える授業改善
学ぶ意欲の向上	1	・「わかる、できる」への授業改善 ・自学習の活用 ・GIGA端末の効果的な活用	・児童の興味・関心を高める導入の工夫や、「わかる・できる」という実感を持たせる授業により、「もっとやってみよう」「またがんばろう」という学習意欲の向上が図られた。 ・外部講師による国語科のモデル授業参観から、教員の授業改善への意欲向上とともに、実践的な改善が図られた ・クロームブックの持ち帰りで、自学習への意欲が高まった。	・発達段階による自学自習の具体的な支援 ・自学習でのGIGA端末の有効な活用
児童指導、児童支援体制の充実	2	・アンケート、児童の面談日実施 ・全教員での臨機応変な児童支援 ・校内支援ルーム開設	・アンケート後の面談で子どもたちの、心理的安定が図られた。 ・サポートタイムは、臨機応変な形で、すべての教職員ですべての子どもを支援することができた。 ・新たな支援ルーム開設で、児童に自信と安心感を持たせることができた。	・児童の自己指導能力の育成 ・支援体制のさらなる充実
地域学校協働活動の推進	3	・教育課程と連携した地域学校協働活動 ・学校運営協議会での班別話し合いの充実	・教職員全員で、班別に協議し取組内容を決め、その実現ができた。 ・学校評価を基に、課題が明確化され、次年度にむかっの取組がイメージできた。	・めざす児童像について、重点取組の明確化。 ・協働活動の体制づくりの整理 ・放課後子ども教室講師の、地域での人材確保

今年度の学校関係者評価委員会からの意見

学校運営協議会の中で、関係者評価を行った。事前に評価アンケート結果を配付し、当日は全委員から、質問・意見をいただいた。「自律した学び」ができる子どもについては、「見えない学力」が曖昧になっているのではないかと、併せて「確かな学力とは」など、言葉の整理が必要であるということが確認できた。次年度へ向けには、「自律した学び」の理念を明確にするとともに、児童自身にも、保護者、地域へも、わかりやすい発信ができるとよいなど、前向きなご意見や改善案をいただいた。現在行っている地域学校協働活動の充実や推進をしつつ、学校教育目標「自律と尊重」をめざし、児童の持つ力を引き出す教育活動をすすめていけるとよいという意見もいただいた。

今年度の学校経営のまとめ ・ 次年度への改善の方針

児童にかかわるすべての大人が、学校教育目標「自律と尊重」を意識していると感じる。児童にも浸透しつつあり、児童が目標を意識しながら自分の生活を振り返ることができている。今年度は、入学当初の1年生のカリキュラムをスタートカリキュラムとして位置付け、弾力的な時間割の設定を工夫し、ゆったりとした時間の中で児童同士のきずなづくりに時間をかけた。運営には保護者や地域の方々の協力をいただき、子どもたちは安心して学校生活をスタートすることができた。「すべてのひとりに届く教育を」をめざし、ホームクラスの授業形態の工夫や授業改善とともに、多様な学びに対応する新たなリソースルームの立ち上げができた。次年度は「ホームクラスで、すべての児童が学ぶ」ことのできる集団づくり、授業づくりにさらに力をいれる。また、児童のメタ認知力を促し、目的意識を持たせ、主体的な学びができるような支援をめざしたい。